

海外学会発表（報告書）

鈴木啓之（アジア）

【会議名】 韓国中東学会・国際会議（KAMES International Conference）

Beyond the New Paradigm in the Middle East: Political Affairs, Islamic Value and Multi Culture

【開催地】 東國大学（Dongguk University） ソウル・大韓民国

【開催期間】 2013年10月11日～10月13日

2013年度韓国中東学会・国際会議において *Japanese Society and Palestine: through Images from Japanese Books and Journals in the 1970s* と題して報告を行った。本報告は、日本語でパレスチナ研究を行う者として長年取り組みたいと考えていたテーマであり、また博士論文で扱う1970年代から80年代にかけてのパレスチナ人による抵抗運動（ナショナリズム運動）が、同時代的にいかなる評価を受けていたのかを明らかにする取り組みである。報告のなかでは70年代初頭に日本語で発行



報告の様子 2013年10月12日

されたパレスチナ関連の書籍と、70年代後半から80年代初頭に発行されていたパレスチナ問題に焦点を当てた日本語雑誌の内容を比較し、いかなる言説上の変化が生じていたかを検討した。この両者を比較するという着想は、板垣雄三氏と臼杵陽氏による1977年が日本社会とパレスチナとの関係における転換点（の一つ）であるとの言及に依拠している。結果、書き手（誰がパレスチナ問題を語っているのか）、パレスチナ人像（パレスチナ人のイメージとは何か）、日本社会からのアプローチ方法（いかなる観点からパレスチナ問題に関わるのか）の3点において変化が見られたことを報告した。



今回の KAMES での報告は、昨年に釜山で開催された AFMA（アジア中東学会連合）国際会議と並び、東アジア地域における中東研究の意見交換の場として大変有意義なものであった。参加者は韓国、日本はもとより、チュニジア、イラン、ウズベキスタン、トルコなど多岐にわたり、それぞれの研究者が専門とする地域を掛け合わせれば中東地域全域と中央アジアを網羅する規模である。また、このような学術会議に韓国外務省や私企業、民間財団、大学が積極的に資金的支援を行い、さらに省庁や企業、在韓大使館の実務者、他学会の代表らが実際に会議に参加する姿には、韓国社会における学術・研究活動への信頼と期待が感じ取られ、日本と比較して羨ましく思わざるを得なかった。

この学会参加においては「卓越した大学院拠点形成支援補助金経費」（平成25年度）のご支援を頂いた。大変感謝するとともに、こと手続きの面でお世話になった東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・事務補佐の遠藤智代氏に御礼を申し上げたい。

（2013年10月14日 鈴木啓之）